

6. 図書紹介

別役 厚子 著

『子どもの貧困と教師 — 東京市万年小学校
をめぐる苦悩と葛藤』

船寄 俊雄 (神戸大学)

*

本書は、2017年2月に留学先のスコットランドのエジンバラで病没された(享年56歳)別役厚子(べっちゃん・あつこ)さんの遺稿集である。東京大学大学院教育学研究科で共に学んだ友人たちが編集にあたった。

以下、若干の私事を記すことをお許し願いたい。別役さんとは面識はないが多少の縁があった。その名前に接したのは、私が広島大学大学院の博士課程で学んでいた頃である。別役さんと同じく高知大学教育学部で学び広島大学大学院に進学していた中村直人さん(現在高知工科大学教授)が、「優秀な友人がいる」と教えてくれた。その後10年ほど経って、なぜ私のところに来たのかは分からないが、彼女から“勤務先(県立高知短期大学)において県が進める教職課程廃止の動きに反対する意見を地元の『高知新聞』に投書してほしい”との要請が来た。確かその教職課程は夜間課程であり、働きながら教職を目指す人が数多く学んでいた。私は、前任校の大阪教育大学において国立大学の教育学部が唯一有する夜間課程で教鞭を執り、得難い経験をしたことがあり、また、夜間中学校を舞台とする山田洋次監督の映画『学校』に感動したばかりであったので、要請に応じ投書したことがある(「学校教育支える二種免許の先生」、『高知新聞』1995年8月29日)。残念ながら同教職課程は廃止されてしまったが、

数年後に同教職課程の歴史と卒業生の声を収録した冊子を送っていただいた。

その後、同大学を退職し、エジンバラ大学大学院に入学し、同大学で博士学位を取得、永住権も取得したが、人種差別・女性差別に苦しんでおられる様子を、彼女の友人たちを介して仄聞していた。いつしかその便りも届かなくなって、逝去されたことを本書の出版で知った。

**

本書の目次の概要を記しておこう。

- I 添田知道『小説教育者・取材ノート』を読む
 - 1 『小説教育者・取材ノート』解
 - 2 『小説教育者・取材ノート』翻刻
- II 万年尋常小学校と坂本龍之輔
 - 1 東京市「特殊小学校」の成立過程の検討 — 地域との葛藤に視点をあてて
 - 2 東京市万年尋常小学校における坂本龍之輔の学校経営と教育観

別役厚子博士学位論文・目次と概要(概要翻訳)

「存在証明」としての学問－解説に代えて(駒込)

別役厚子年譜・著作一覧

本書は2部構成となっている。第I部には、1993年から96年にかけて高知短期大学『社会科学論集』に7回に分けて連載されたものを、解題部分と翻刻部分に分けて別々に収録されている。

第II部には、第I部の作業と並行して執筆された論稿が収録されている。初出は、前者

が教育史学会の紀要『日本の教育史学』第38集（1995年）、後者が『東京大学教育学部紀要』第30号（1991年）である。

英文で書かれた博士学位論文は、「一九世紀のスコットランドにおける貧民救済事業の慈惠的性格を問い直した」（387頁）ものであるが、本書にはその目次と概要が収められ、概要が小玉亮子さんによって翻訳されている。

その後に駒込武さんが心のこもった丁寧な解説を寄せ、最後に川村肇さんによる年譜と著作一覧が収録されている。

また、大学院で彼女の指導にあたった堀尾輝久さんと寺崎昌男さんが、彼女の人柄と仕事の意義に触れる心暖まる「はしがき」と「まえがき」をそれぞれ寄せている。

本書の中心、すなわち別役さんが残した仕事の核心は第I部にある。添田知道（1902～1980）が『小説教育者』を執筆するに際して、主人公の東京市の下谷万年小学校長を務めた坂本龍之輔（1870～1942）に取材をした時の『取材ノート』の翻刻とその分析である。それについて、「はしがき」で寺崎さんは次のように述べている（5頁）。

「取材ノート」に手を触れ、読み解き、複写し、そして解題を書くという仕事は、教師とその実践の研究に正面から迫りたいと言っていた別役さんの初志にもっとも近い仕事であったに違いない。……時間と根気が不可欠な作業を支えたのは、今は亡き彼女にとって、研究者としての本懐を遂げた喜びだったのであるまいか。

寄せ集めの遺稿集ではなく、別役さんの仕事を学術的書籍に仕立てられた関係者の皆様のご努力に感謝しつつ、彼女が残した仕事を

手がかりにして改めて『小説教育者』を読み直してみたいと強く思う。

（六花出版刊 2019年2月発行 3,800円＋税）